2025 年 3 月
NEC キャピタルソリューション株式会社

わくわく子どもの池プロジェクト活動報告
葛飾区立亀青小学校（2024 年 12 月造成）

亀青小学校の校庭には、ヨシがたくさん生え、アメリカザリガニが住み着いてしまったコンクリート製の池があります。今回、5 年生の子どもたちが色々な生きものが来てくれるよう、この池をビオトープに再生することになりました。

1 回目授業（2024 年 5 月 9 日座学）

5 年生 3 クラスとなかよし学級を対象に、オンラインでの授業で、生きものの体のつくり、暮らし、すみかなどを知り「生きものとおはなしする方法」や「生きもののくらしは『ありがとう』（自然の循環）でつながっている」ということを学びます。

教室では Zoom 画面をモニターに投影して授業を受けます。

2 回目授業（2024 年 6 月 25 日座学）

子どもたちは前回の授業を踏まえて、再生するビオトープには何が必要か、アサザ基金の飯島先生と考えました。

現在の池はヨシが茂って風通しが悪く、生えている草の種類も少ないので色々な生きものが住むことができません。池の水面が空から見えて、周りに色々な草が生えてい

れば、たくさんの生きものを呼べるようになります。

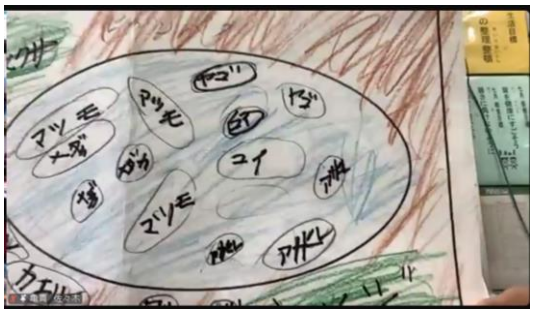
ビオトープの小さな水辺で、「ありがとうのつながり」の中で暮らしていける生きもののメンバーを考えて、次回までに設計図を考えることになりました。

3 回目授業　（2024 年 7 月 16 日座学）

ビオトープの設計図の発表です。どんな池にしたいのか、どんな生きものに来てほしいのか発表します。

発表が進むと、校庭のビオトープの面積が限られているので大きさに制約があること、池に住み着いている外来種のアメリカザリガニの捕獲が必要であることが分かってきました。

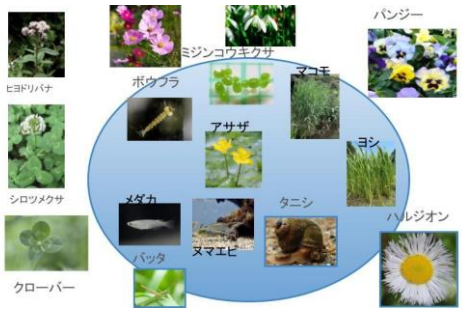
3 クラスで 12 班分の設計図があり、どの設計図で進めるのかを考えることになりました。



設計図の絞り込み（2024 年 10 月）

クラスごとに１つずつ設計図の絞り込みを行い、飯島先生にコメントをもらいました。

1 組

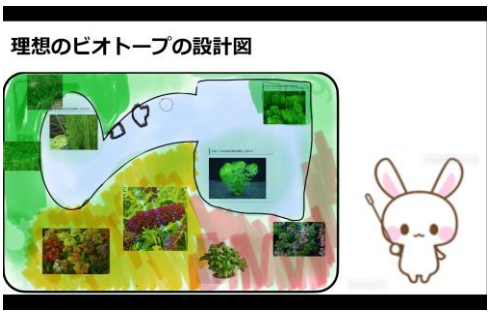


(飯島先生)

「ミジンコウキクサなどウキクサの仲間は増えすぎると水面をすべて覆ってしまって、水の中の酸素が足りなくなって、水中の生きものが暮らしにくくなってしまうかも。」

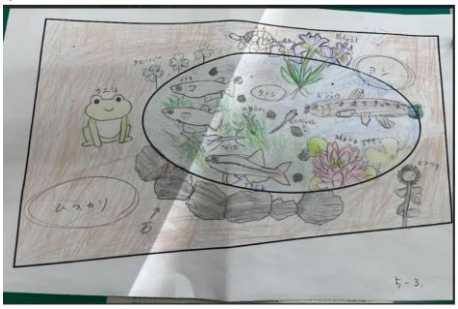
「カブトエビは外国からやってきた外来生物の一つです。みんながビオトープを作る目的は何だったかな？　思い出して、考えよう。」

2 組



「いろいろ水草、生き物がやってきそうな花を入れるようですね。なるべく昔、学校の周りなどにあった水草を植え戻そう。」

3 組



「カメやドジョウは授業中にも伝えたように、この池の中ではとても強くて、ほかの生きものや水草がすべてなくなってしまう可能性が高いです。」
「アカヒレは、日本で、みんなの学校の周りに昔からいた生きものではありません。スイレンも、日本の水辺の植物ではなく、観賞用につくられたとても強い水草です。」

(担任の先生)
「『日本やその土地に昔からある動植物を生かすことが大切だ』とわかってはいるものの、子どもたちが設計図を作る様子を見ていて、どこまで自分の地域の動植物を知っているか、意識しているかというところが難しいと感じました」

子どもたちがこの授業をきっかけに興味を持って、調べたり気づいたりしてくれたらうれしいです。

ビオトープの準備作業（2024 年 10-11 月）

生きものが安心して住めるビオトープにするために、大人たちで池をきれいにする作業を行いました。ヨシを刈り取り、根や古い土をすべて取り除きます。どのくらいの深さがあるかわからなかったため、数日にわけて土を掘りだしました。池に住んでいたヒキガエルとアメリカザリガニは、それぞれお引っ越ししてもらいました。

4 回目授業（2024 年 12 月 17 日）

よく晴れた暖かい日に造成です。まず池の底に新しい土を敷き詰め、次に池の中に坂をつくりました。いろいろな生きものが安心して暮らすためには、浅いところと深いところが必要だからです。

準備ができたところで水草を植え、池に水をためてから放課後にメダカ、タニシ、ヌマエビを放流しました。

植えた水草は、昔から日本の水辺にある草たちです。ミクリ、コウホネ、カサスゲ、

ショウブ、ウキヤガラ、フトイ、アサザを植えました。今は根っこや茎の部分だけですが、水の中から新しく成長してくるでしょう。

池の近くでもともと住んでいたヒキガエルが冬眠しようとしているところを見かけました。住みやすくなったビオトープに戻ってきて、メダカたちとなかよく暮らしてほしいですね。

以上